

# 三木町埋蔵文化財調査報告

池戸八幡神社1号墳

堀切古墳群

1994年3月

三木町教育委員会

## はじめに

郷土に残されている文化財は、ふるさとの先人達が残した貴重な文化遺産であります。このような文化財を後世のために大切に保存し、また文化財に学んで新たな文化を創造することが現代を生きる私たちにとって当然の責務と言えるでしょう。

三木町内は近年、各種の開発事業が多くなり埋蔵文化財の保存に関する問題も飛躍的に増加する傾向があります。中には記録保存のための発掘調査を実施した事例もありますが、地域振興のための開発と文化財保護との調整は今後とも真剣に考えていかなければならない問題であります。

今回測量調査を行いました池戸八幡神社1号墳は以前から一部の人には知られていましたが、調査によって三木町内で初めて前方後円墳であることが確認され町内でも有数の文化財であることが判明いたしました。また、墓地造成に伴って古墳の範囲を確認するために試掘調査を行いました堀切古墳については、新たに1基古墳が所在していることが判明し、また円筒埴輪をもつ6世紀前半の古墳であることも確認されました。いずれも短期間で小規模な調査でしたが郷土の歴史を大きく変えるような成果が挙がりました。今後ともこのような基礎資料整備のための調査は積極的に行っていくべきであると考えられます。

貴重な文化遺産である埋蔵文化財は本町には極めて多く所在しており、今回の調査の成果を今後の埋蔵文化財の保護に十分役立てていきたいと考えております。十分とはいえませんが調査を担当した機関としての責務を果たすため本報告書を作成いたしました。多くの方々に町内の貴重な文化財について理解していただければ幸いです。

最後になりましたが今回の調査に際しまして御理解と御協力をいただきました関係者各位、調査を担当していただきました調査員の方々に心から感謝申し上げます。

平成6年3月

三木町教育委員会教育長 出井 健一



## 例　　言

1. 本書は平成5年度に三木町教育委員会が遺跡内容把握のために実施した池戸八幡神社1号墳測量調査と堀切古墳群試掘調査の概要報告書である。
2. 各古墳の調査期間は以下のとおりである。  
(池戸八幡神社1号墳) 平成5年8月1日～8月8日  
(堀切古墳群) 平成5年10月7日～10月10日
3. 調査はいずれも三木町教育委員会が主体となって行った。堀切古墳群については香川県教育委員会が調査指導を行って実施した。
4. 本書挿図中のレベルは海拔を、方位は磁北を示す。挿図の一部は建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図「高松南部」、「志度」、「川東」、「鹿庭」を使用した。
5. 本文頁は通し番号を付したが、挿図、図版番号については個別に付している。
6. 調査期間中は通じて池戸八幡神社、宗教法人長覚寺の関係者から多大な御指導、御協力を得た。
7. 整理作業中、大久保徹也氏、佐藤竜馬氏の御指導を得た。
8. 本文の執筆、編集は國本が行った。

## 目 次

### [ 池戸八幡神社 1 号墳 ]

第 1 章	調査に至る経過	1
第 2 章	立地と環境	2
第 3 章	調査の結果	6
第 4 章	まとめ	9
	図 版	11

### [ 堀切古墳群 ]

第 1 章	調査に至る経緯と調査の方法・経過	17
第 2 章	立地と環境	18
第 3 章	調査の結果	23
第 4 章	まとめ	28
	図 版	29

## 挿図目次

### 〔池戸八幡神社1号墳〕

第1図	周辺の遺跡地図	3
第2図	古墳群分布図	4
第3図	墳丘測量図	7
第4図	墳丘復元図	8

### 〔堀切古墳群〕

第1図	周辺の遺跡地図	19
第2図	付近の古墳分布図	21
第3図	堀切古墳群周辺地形図	22
第4図	墳丘測量図、トレンチ配置図	23
第5図	1、5トレス平断面図	25
第6図	7トレス平断面図	26
第7図	出土遺物実測図	27

## 図版目次

### 〔池戸八幡神社1号墳〕

1-1	古墳群全景
1-2	1号墳後円部（南から）
1-3	同上（東から）
2-1	後円部後方の堀切り
2-2	前方部全景（後円部から）
2-3	同上（北から）
3-1	2号墳
3-2	3号墳
3-3	4号墳

### 〔堀切古墳群〕

1-1	1号墳墳丘
1-2	1号墳中央盜掘坑
2-1	1トレス全景
2-2	5トレス2号墳周溝
3-1	7トレス塊石群検出状況
3-2	8トレス2号墳周溝



# 池戸八幡神社1号墳



## 第1章 調査に至る経過

三木町内にはこれまで前方後円墳の所在が確認されておらず、県内に多数分布する前方後円墳の空白地帯とみなされてきた感がある。弥生時代前期以降の遺跡の分布状況は他の市町と比較しても遜色がないだけに、このような特徴は奇異な印象を与えている。前方後円墳ばかりでなく古墳時代前期から中期前半にかけての時期には築造されたと考えられる古墳自体も極めて少ない状況にあった。西側に隣接する高松市の東部には高松茶臼山古墳、三谷石舟古墳等の大型前方後円墳が所在しており、東に隣接する長尾町には丸井古墳、中代1号墳、稻荷山古墳等多くの前方後円墳が所在しているため、古墳時代前期～中期前半にかけての時期には両地域のいざれかの勢力圏に含まれていたとする考えもあった。

そんな中平成5年春、三木町内に在住する調査員が池戸八幡神社の下草刈りと清掃に参加した折、從来から古墳が所在しているとされてきた神社参道脇について改めて踏査を行った。古墳状のマウンドは4箇所程度認められたが、北端の最高所に所在するものには北に向かって細長く延びる突出部が見られることが注目された。

前方後円墳であれば町内で初めて確認されたものであり、保存状態も良好であることから重要な遺跡であることは確実であった。そのため墳丘に関する基礎資料整備とともに関係者への周知活動についても充分に行っておく必要性が認められた。

そこで、三木町教育委員会に対しては古墳の所在と重要性について説明し、資料整備のために測量調査を実施したい意向を伝えた。その際調査は発見者が中心となって休日を利用して行うが、調査の主旨から町教育委員会に調査主体となっていただきたい旨の依頼も行ったところ快く了解していたたげた。地元関係者については、7月に行われた総代会に参加させていただき、土地所有者である池戸八幡神社宮司村井郁夫氏をはじめ各地区の総代8名の方々に調査の主旨と方法等について説明を行った。いずれの方々も古墳の存在自体が初耳であったようであるが、調査に快く賛同されたばかりでなく伐開に必要な草刈り機についても提供していただいた。御協力いただいた関係者は宮司村井郁夫氏、総代長安田平一氏、総代千葉隆敏氏、滝川新一氏、三好岩文氏、松原辰巳氏、川田俊光氏、山地照男氏、佐野正行氏の方々である。

こうして、町教育委員会が主体となって有志3名が調査担当者となるという体制で8月1日から測量調査を開始した。調査担当者は國木健司、森下英治、山元敏裕の3名であったが、調査に対しては山本英之氏、西谷由紀子氏の御協力を得た。

## 第2章 立地と環境

三木町は香川県の中央部やや東よりの位置に所在する南北約18km、東西約5kmの南北に細長い町である。地形的には町中央部を平野部が南半部及び北端付近を山塊が占めており、瀬戸内海とは接していない。また、北方は急峻な独立丘陵を境に牟礼町及び志度町と南方は阿讃山脈を境に徳島県脇町に接する。

南方の阿讃山脈に源を発して北流する吉田川、新川等の中小河川は中流域にあたる町中央部に沖積平野を形成した後、北部丘陵裾付近で流路を西に変換し、西方の高松平野へと至る。町中央の沖積平野は現在ではおおむね平坦地形をなしており、その形成過程及び微地形復元には困難な部分も多い。従って、沖積平野における遺跡の分布・展開等は未だ明確となっていない状況にある。

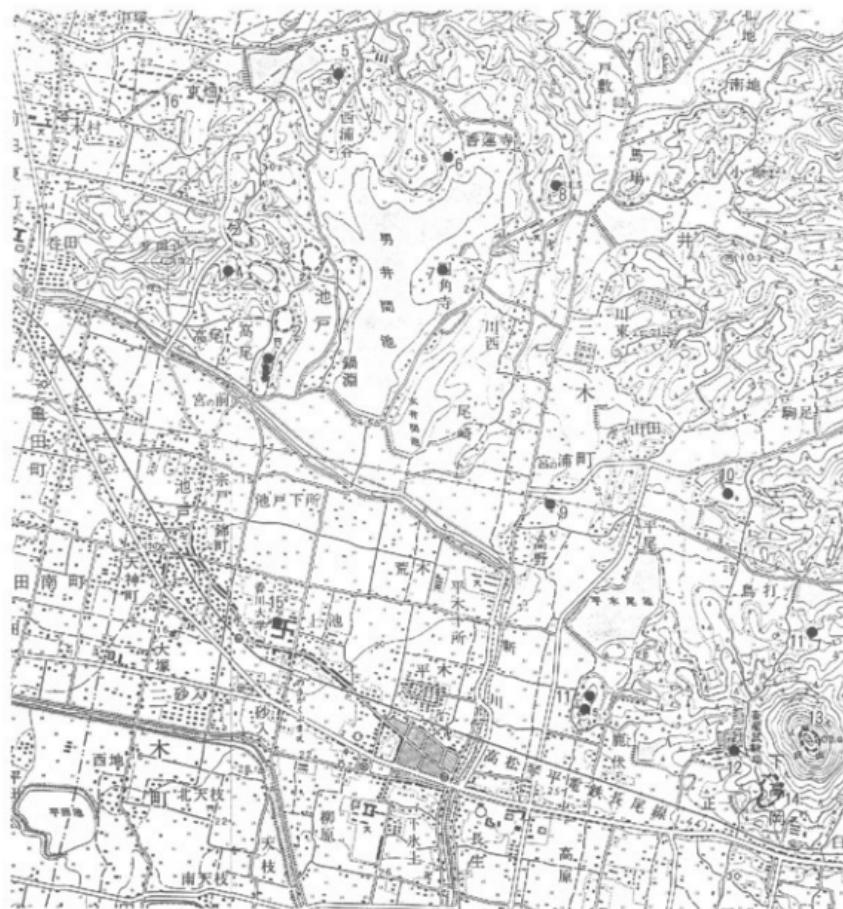
町内においてはこれまで縄文時代以前の遺跡は知られていないが、隣接する長尾町内では近年縄文時代後・晚期の土器が出土しており、また西方高松市の春日川流域には前期の下司遺跡、晚期の光専寺山遺跡等がみられているため、三木町内でも当該期の新たな遺跡発見が期待される。

弥生時代前期には香川大学農学部内において校舎建設時前期後葉の壺・甕等が多量に出土している他、鹿伏地区の古川堤防改修工事時にもほぼ同時期の遺物が出土しており、周辺に集落遺跡が広がっている可能性は高い。

中期では前半期の遺跡は知られていないが、白山周辺に後葉段階の遺跡が数多く知られている。白山山頂部（白山2遺跡）には弥生土器・石器等の散布が知られ、西麓付近の西に延びる屋根筋南斜面（白山1遺跡）からは明治初年に6区袈裟繩文銅鐸が出土している。

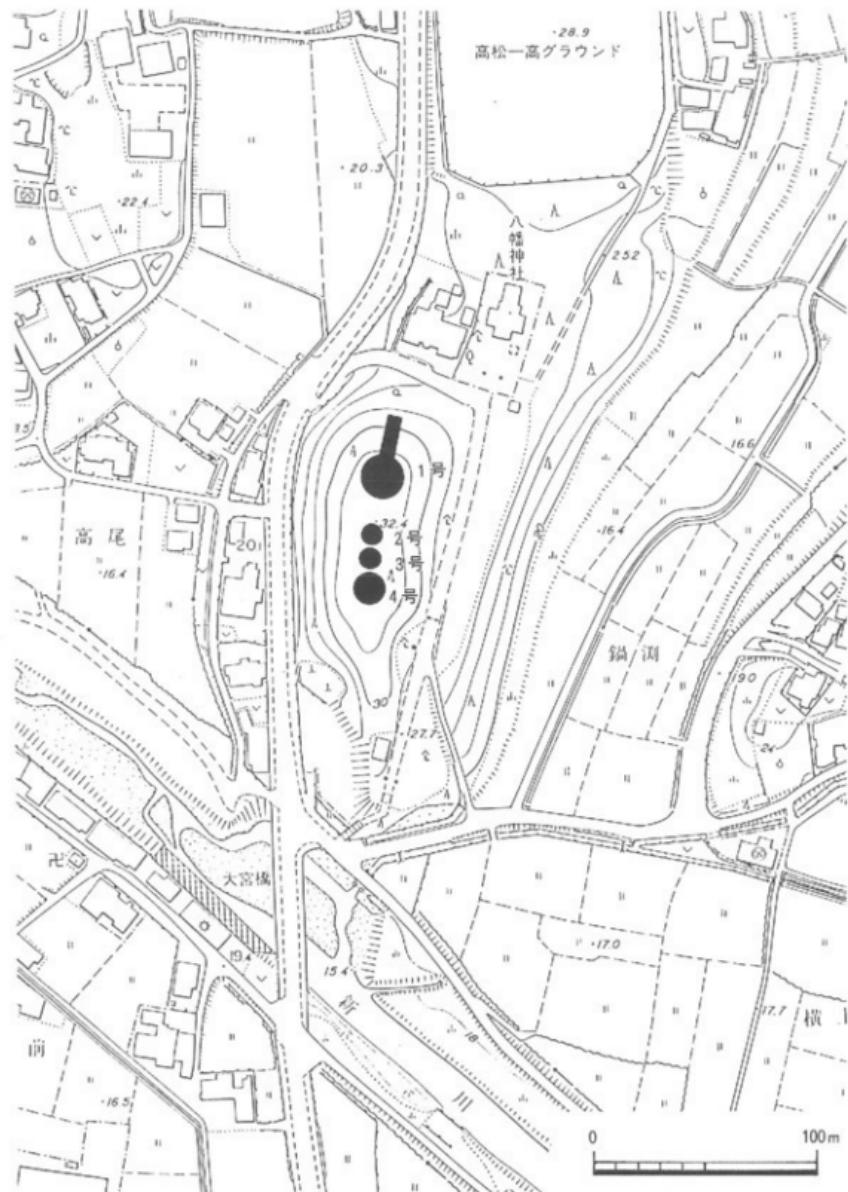
また、周囲の小屋根上からは各所で弥生土器・石鍬等が出土しているが、特に南西に延びる屋根上からは多くの土器・石器類とともに竪穴住居（白山3遺跡）が検出されている。山頂部と山麓部の各遺跡間の相互関係については不明であるが、今後の調査・研究が期待される地区である。

後期には発掘調査例はないが各所で土器片の出土が知られており、町中央の沖積平野の開発が相当進んできたことを物語っている。墓剖については時期決定が困難であるが権八原C地区方形台状墓が終末期に築造されるほか、南部丘陵でも西土居古墳群、丸岡古墳群、石塚古墳群等で甕棺・土壙墓等が多数発見されており後・終末期の所産と考えられる。また、最近権八原古墳群が所在する丘陵から南西に延びる屋根上の高尾遺跡で石蓋土壙が検出されている。



- |                    |                  |
|--------------------|------------------|
| 1. 池戸八幡神社古墳群（今回調査） | 9. 高野八幡社古墳       |
| 2. 池戸八幡神社裏古墳群（消滅）  | 10. 駒足古墳群        |
| 3. 塚八原古墳群          | 11. 烏打大西谷古墳群     |
| 4. 高尾遺跡（石蓋土壇）      | 12. 白山1遺跡（銅鐸出土）  |
| 5. 五分一池古墳群         | 13. 白山2遺跡        |
| 6. 香蓮寺跡            | 14. 白山3遺跡（弥生中期末） |
| 7. 七ツ塚古墳           | 15. 農學部遺跡（弥生前期末） |
| 8. 富士の越山頂古墳        | 16. 前田東中村遺跡      |

第1図 周辺の遺跡地図



第2図 古墳群分布図

古墳時代に入ると北部丘陵では風呂谷古墳、南部丘陵については石塚古墳群、丸岡古墳群、西土居古墳群等の発掘調査が行われ後期古墳の様相はある程度判明しているものの、前、中期古墳の動向は不明瞭な部分が多い。その中で権八原古墳群は全面発掘が行われた唯一の古墳群で、5世紀後半段階の15基からなる古式群集墳として著名である。主体部及び副葬品については削平が著しいため不明であるが、小円墳が近接して築造され、初期須恵器の供獻が顯著であること、円筒埴輪の樹立が認められないこと、甲冑等武器類の副葬が認められないこと等、県内他地域の古式群集墳と明確な相違をみせる。

権八原古墳群の南方丘陵上には大正年間に造成された刀剣、須恵器、円筒埴輪、ガラス小玉の出土を伝える池戸八幡神社古墳群が所在していた。今回測量調査を行った池戸八幡神社古墳群と同一丘陵上に位置するもので、その形成・展開を検討するうえで重要な古墳群である。

後期古墳は南部丘陵では先述のとおり数多くの調査例があるが北部丘陵では風呂谷古墳以外実態の判明している例はない。ただ、古墳の分布傾向としては南北両丘陵地帯に明確な相違がみられる。南部丘陵では勝負谷・石塚古墳群、かんかん山古墳群、城池古墳群、蛇の角古墳群等5～10数基からなる中小規模の群集墳が形成されているが、北部丘陵には単体から数基が散在して分布する傾向がある。

池戸八幡神社古墳群は北部丘陵の南縁辺部に所在する低い独立丘陵上に築造されたもので4基からなる。同丘陵の南方には眼前に新川が西流しており、東西両側は狭い谷筋によって挟まれた位置にあるため、古墳群の勢力基盤は新川南方の広大な平野部に求めるべきかもしれない。北方は池戸八幡神社裏古墳群から小規模な鞍部を挟んで権八原古墳群、高尾遺跡が所在する丘陵に至る。したがって、これらの古墳群を含めれば付近は20基以上からなる大古墳群を形成していた地域とみなすことができよう。

今回測量調査を行った池戸八幡神社1号墳は独立丘陵最高所に築造されたもので、古墳群の4基中では北端に位置する。2号墳はその南方約15mに位置する円墳で、直径約8m、高さ0.5mを測る。マウンドは低いが明瞭に認められる。3号墳はその南方に所在し、2号墳との基底部間距離は2mと近接した位置にある。直径8m、高さ0.7mとやはり小規模な円墳であるが保存状態は良好である。4号墳は3号墳とは基底部を接して南側に築造された古墳で、南側基底部付近を一部削平されているため現在の墳丘は東西11m、南北9mの長方形を呈するものとなっている。方墳の可能性もあるが本来は径12m程度の円墳であったものと思われる。高さは約1.5mと1号墳を除けば最も高い古墳である。低いマウンドを持つ2～4号墳については横穴式石室を主体部に持つと考えるのは困難であり、立地、分布状況、形状、規模等権八原古墳群に近似することからすれば5世紀後半から6世紀前半にかけての古式群集墳とみなすのが妥当であろう。1号墳の意義、性格等を考える上でこれら周辺の大規模な古式群集墳の存在は看過できない特徴であろう。

## 第3章 調査の結果

### 1. 概況と保存状況

古墳は神社参道西側の山林中に所在している。北東方向に前方部を向けた前方後円墳で後円部が丘陵最高所に位置している。現在、後円部上に石碑の基壇が建立されており、東方の参道から幅約1mの小規模な管理道が設けられている。後円部のやや急な斜面部には5段の石段が設置されており、この部分が墳丘部で唯一後世の改変を受けているとみなされる。他には後世の掘削、改変を受けていると思われる部分は見受けられず、保存状態は極めて良好な古墳とみなすことができる。

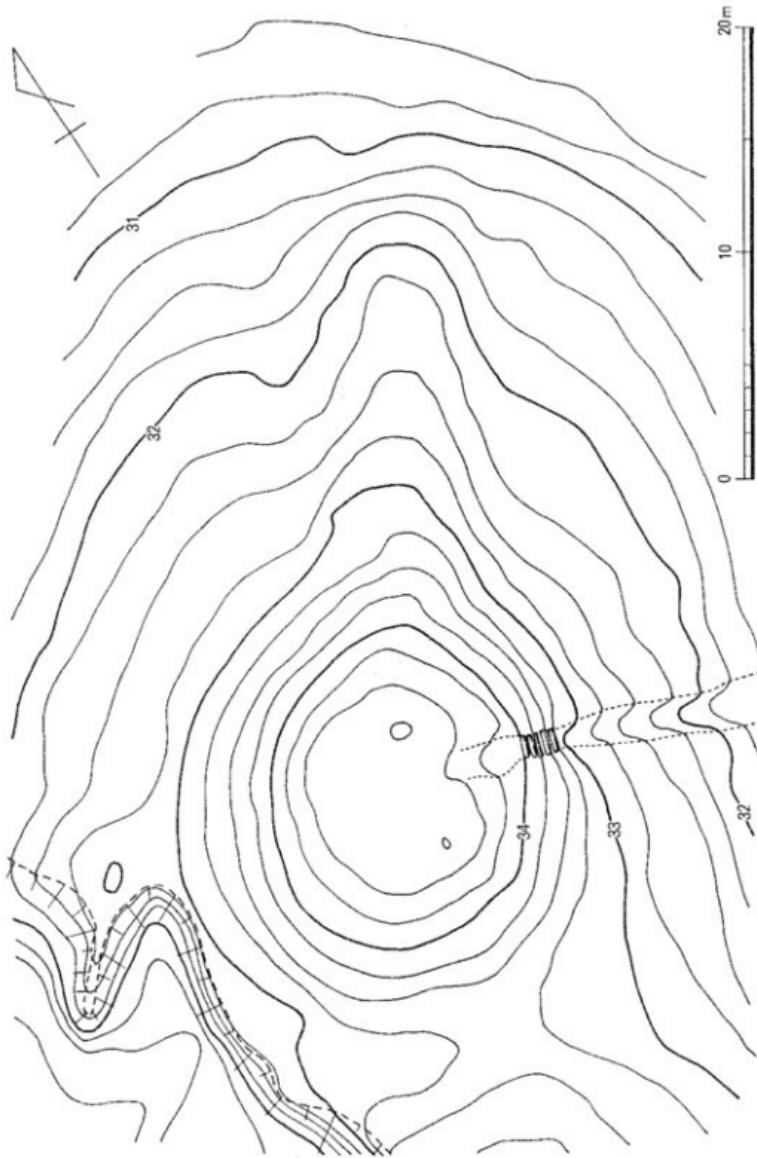
後円部後方（南側）には堀切状の凹みが見られる。後円部西側には基底部近くまで土取り跡と思われる大規模な掘削がみられ、この堀切状遺構の西端付近を一部切り崩しているものとみなされる。後円部西側の斜面上には安山岩の小塊石が散乱しているが、葺石であるのか主体部を構成していたものであるのかは即断できない。ただ、比較的大型の平石も少数含まれるため石室が一部攢乱を受けその石材が散乱していることは確実であろう。

前方部は北に向かって緩やかに下る傾斜部に築かれており、その上面も北に向かって次第に下るものとなっている。周辺の広い緩斜面部からの隆起は明確であり、基底部の傾斜変換も直線的かつ明瞭に認められる。くびれ部の形状も整然としているため後世の盛土によって形成されたものとみなすのは困難であろう。また上面は平坦でやはり整然としているため削平を受けている可能性も少ないのであろう。

### 2. 規模と形状

後円部は丘陵頂上部にあり基底部の傾斜変換も明瞭であるため形状、規模ともにほぼ全容が伺い知れる。東側は33.5～38.0mの高さに基底部が求められ南に向かって次第に上昇する傾向にあるが、後述する堀切部分の埋没によるものとみなすことができよう。西側については33.0～33.2mとほぼ同一レベルに基底部が求められる。東西両側で基底部高に約50cmの比高差がみられるが、東側の墳丘傾斜角度が18～20°前後と西側の16°と比較してやや急であることからみて若干埋没が進んでいる結果と見做すことが可能である。南側については現在3.25mのセンター付近に基底部が求められる。この部分については堀切り状の凹みがみられ、墳丘傾斜角度も14°程度とさらに緩い傾斜であることから、より一層埋没が進んでいるもの

第3圖 填丘測量圖



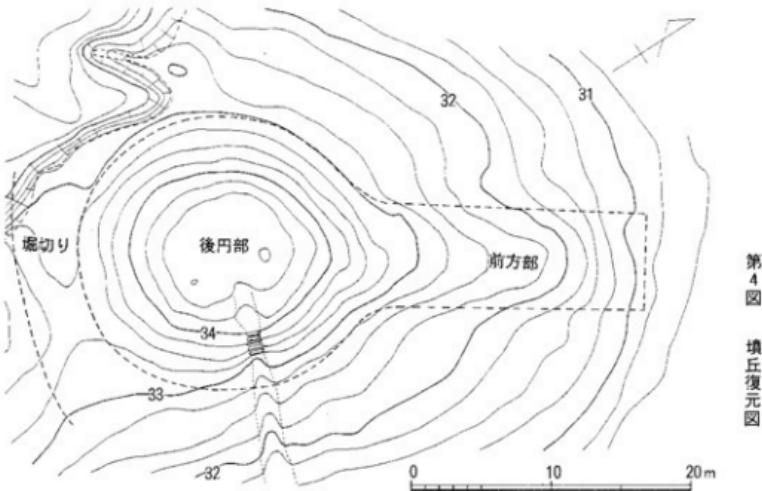
とみなすことができよう。こうしてみると、後円部の基底部はほぼ同一レベルに設定されているものと考えられる。

後円部の平面プランは南北方向に若干細長い橢円形を呈している。東西径は約19m、南北径は約21mで2m程度墳丘主軸方向に細長いものとなっている。高さについては東西両側面から計測すると1.8mとなる。墳頂部には東西径約8m、南北径約9mの平坦部がみられる。周囲の傾斜部は水平距離で5~6m先述の傾斜角度で一様に下るものであり、段築の痕跡は認められない。墳丘西側斜面には小児頭大の安山岩塊石が散乱しており葺石の可能性も認められる。

前方部は低く細長い点に最大の特徴がある。ちなみに、東西両側の基底部と頂上平坦部との比高差は30~40cm程度と極めて低いものとなっている。基底部のレベルも頂上部のレベルも先端に向って次第に下っている点も特徴的で、くびれ部と前方部先端の基底部レベルに、1.5mもの比高差がみられる。頂上平坦部は概ね北に向って5°の傾斜角度で下っているが、先端付近の約6mの範囲は15°前後と後円部とはほぼ同様の傾斜角度をもつ。

前方部の幅はくびれ部付近で7.4m、中央付近で6.8m、先端付近で7mとほとんど差のないものとなっている。後世の埋没等を考えればほぼ同一の幅に設定されていたものとみなしてよいであろう。したがって、平面プランは柄鏡形に設定されていたものと考えられる。前方部長は約17mである。

後円部後方には先述のとおり堀切り状の凹みが明瞭に認められる。5m程度の幅で後円部後方を取巻くように深さ30~50cmの溝が掘削されているので、古墳に伴う施設とみなしてよいであろう。後円部は丘陵をこの堀切りで切断することによって形成しているものと考えられる。



## 第4章 まとめ

前章で検討した墳丘に関する細部の規模をまとめると以下のとおりとなる。

(古墳総長)	43m	(くびれ部幅)	7.4m
(墳丘全長)	38m	(前方部先端幅)	7 m
(後円部径)	19～21m	(前方部先端高)	1 m
(後円部高)	1.8m	(前方部長)	17m

各部位の長さ及び全長に関しては県内で一般的に見られる規模のものであり、特に特徴的な点は見られない。町内にあっては径30m程度と推定される八王子古墳を凌ぎ最大規模を持つものであることは確実であろう。

形態上の特徴は3章で述べたので繰り返さないが、時期については出土遺物に関する情報がない現時点では墳丘に関する諸特徴から推定せざるをえない。それらを箇条書きにまとめると以下のとおりとなる。

- ①. 前方部が低く先端に向って下る形状は古墳時代前期でも古い段階以前の特徴と言えるものである。柄鏡形の前方部あるいは突出部でこのような特徴を持つものは県内では綾歌町平尾2号墓、石塚山1号墳等が知られ、他県では徳島県萩原1号墓、兵庫県養久山5号墓などが著名である。概して典型的な前方後円墳出現以前の形状とみなすことができよう。庄内式新段階併行期以降比較的長期間にわたって県内の前方後円墳のはほとんどがバチ形に開く前方部を持つことからみて、本墳が前期古墳であれば例外的なものとなる。前方部の特徴を重視すれば弥生時代の墳丘墓として位置付けられる可能性が高い。
- ②. 後円部は後方を堀切り状に丘陵を切断して構築している。この堀切りによって後円部は基底部をほぼ同一レベルに設定することを可能にしている。円形のマウンドをもつ弥生時代の墳丘墓にはこのような堀切りは石塚山2号墓、寒川町奥10号墓等でみられるが、前方後円墳では前期末から中期初頭の津田町岩崎山4号墳、けば山古墳等が初見である。墳丘の側面にも一定幅のテラス面が巡っていた可能性も高く、このような特徴も前期後半から中期全般にかけての特徴とみなすことができる。以上の諸特徴は本墳を前期末から中期初頭にかけての時期に位置付けられる根拠として挙げられる。

墳丘の断片的な資料からではあるが、池戸八幡1号墳は弥生時代後期末あるいは古墳時代前期末～中期初頭のいずれかの時期に属する可能性が高いと思われる。前者であれば権八原C地区方形台状墓や高尾遺跡との密接な関係が伺えるとともに、県内の典型的な前方後円墳

出現期の具体的諸様相を解明するうえで貴重な遺跡となることになる。また、後者であれば小地域内で展開してきた首長勢力が次第に結集する段階にあって、三木町内にも自立的な勢力を有する首長が存在していたことになり、当該期の県内の政治的動向を検討するうえで無視できない存在となろう。

詳細は発掘調査を実施しなければ判明しないが、これまで古墳時代前期の様相を検討するうえで見過ごされがちであった三木町内に屈指の有力墳が存在していることが明らかになっただけで、今回の測量調査の最大の成果と言えるであろう。

#### (おわりに)

近年、県内の開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は県下全域に及んでおり、これまで遺跡の所在が知られていなかった地域においても多種多様な遺跡の発見が相次いでいる。三木町においても例外でなく平成3年度以降、埋蔵文化財の保存に関する協議、調査等を行わなければならない事例が急激に増加する傾向にあった。3年度に発見され4年度に確認調査を行った高尾遺跡、4年度に事前調査を実施した風呂谷古墳、5年度に分布・試掘調査を行った堀切古墳群、西土居古墳群、白山3遺跡等であり、その都度重要な遺構・遺物が確認されている。

三木町は数多くの重要な遺跡が所在している高松市と大川郡に挟まれた位置であり、本県の考古学研究上では從来さほど重要視されていなかった地域という感がある。東西に長尾平野と高松平野という弥生時代以来の重要な集落遺跡、古墳等が林立する中にあって、拠点的な集落が未確認であること、前方後円墳及び巨石墳が存在していないこと等の特徴に起因するものと考えられる。そんな中にあって弥生時代中期末の高地性集落である白山遺跡群、古墳時代中期の古代群集積として著名な権八原古墳群、白鳳寺院の可能性もある上高岡廃寺、長楽寺等特定の時期については重要な遺跡の所在が知られている。近年の事前調査等により新たに重要な遺跡の発見が相次いでいることを考えれば、今後遺跡の空白期と考えられてきた時期についても未確認の遺跡が所在している可能性は極めて高いといえるであろう。

今回の調査は短期間の測量調査であったが、空白期を埋める貴重な古墳の存在が明らかになった。県内の古墳時代前期社会を研究するうえで三木町も重要な位置を占める地域とみなすことができよう。また、池戸八幡神社古墳群の存在は権八原古墳群をはじめとする周辺地域の古墳群に関し、それらの意義を再検討する必要性を訴えかけるものである。あらためて基礎資料整備のための調査活動が重要であると再認識するものである。もっとも、不用意な発掘調査は戒めなければならないが、調査体制の如何を問わず有志の者によるこのような基礎資料を充実するための活動自体は今後とも多いに推進されるべきであろう。



1. 古墳群全景



2. 1号墳後内部（南から）



3. 同上（東から）





1. 後円部後方の堀切り



2. 前方部全景 (後円部から)



3. 同上 (北から)





1. 2号墳



2. 3号墳



3. 4号墳



# 堀切古墳群



## 第1章 調査に至る経緯と調査の方法、経過

平成5年6月三木町大字氷上字堀切地区において宗教法人長覚寺より墓地造成のための土地売買届出書が香川県に提出された。堀切池に三方を囲まれた独立丘陵を約1ha造成しようとするもので、丘陵頂上部の山林中には周知の埋蔵文化財包蔵地である堀切古墳の所在が知られていた。堀切古墳の内容・範囲等が不明であったことから三木町教育委員会は県教育委員会の指導を受け現地を踏査、古墳が現在のマウンド部分より外側に広範囲に広がっている可能性が認められたため、町教育委員会が主体となって測量試掘調査を行うことになった。調査予定期間は平成5年10月7日から9日までの3日間である。

現地踏査では径15mほどの円丘から北に向かって延びる前方部が存在している可能性が指摘されていた。そこで今回の調査では古墳のマウンド部分以北を可能な限り測量するとともに、円丘マウンド北裾を中心に1~3トレの3本のトレンチを設定した。

1トレでは南端付近で浅い溝を検出した他、北端付近で大規模な周溝を確認した。この溝が堀切古墳に伴うものとすれば前方後円墳の可能性が高まるため、さらに4、5トレを追加設定した。2~4トレはその前方部推定地の両側面に相当するものであるがいずれも表土、腐食土及び薄い堆積土直下が地山の緩斜面となり、墳丘整形の痕跡等は認められなかつた。それに対し、5トレでは1トレ北端の周溝延長部を検出したため、別な古墳が所在する可能性が強くなった。6~8トレはその古墳の確認を目的として設定したものである。

6トレでは西端付近で浅い落ちが確認され、8トレ北端付近では深い溝が検出されたため、別な古墳が所在することが確実となった。7トレ周辺には大型塊石の散乱が認められたが、調査によって石室の残骸と思われる敷石遺構を検出している。

以上の調査によって周知の堀切古墳の他に古墳が一基所在することが明らかになった。そこで周知の古墳については堀切1号墳、新たに発見したものについては堀切2号墳という名称を設定した。

予想以上の成果が挙がった調査ではあったが、試掘調査に手間どったため予定の調査期間中に地形測量を完了することができなくなった。そこで測量については別途10月10日に行うことになった。この測量に際しては山本英之、山元敏裕氏のご協力を得た。

## 第2章 立地と環境

三木町の南部丘陵は中小の河川により開折が進み多くの谷筋が開く位置に小規模な扇状地形を形成している。比較的大きい流域をもつ河川としては東から新川、鍛冶川、吉田川朝倉川が挙げられる。これらの流域の谷筋、扇状地に向って無数の小丘陵、支脈が派生しているが、それらの稜線上、緩斜面部あるいは先端部には数多くの古墳が築造されている。

新川流域には南から野倉古墳群（2基）、西山古墳、剣山古墳、天満古墳、西土居古墳群（6基）、高木古墳群、カンカン山古墳群（13基）等が知られているが、近年土壙墓群、壺棺等の存在も明らかになってきている。鍛冶川流域は谷筋が開く位置に巨大な山大寺池が築造されており本来の景観とはかなり異なっているものと思われるが、池を取り巻く丘陵上に山大寺池北丘上古墳、山大寺池西丘上古墳、その上流域に氷代谷古墳等が築造されている。以上の2つの水系については確認されている古墳の全てが後期古墳であり、確実に中期以前に遡るものは知られていない。

今回調査対象となった堀切古墳群が所在する吉田川水系は低丘陵によってさらに小水系に細分が可能と思われるが、いずれについても数多くの古墳の所在が知られている。東から嶽山西麓の蛇の角古墳群（16基）、堀切古墳群、丸岡（水上八幡神社）古墳群（2基）、石塚古墳群（5基）、勝負谷古墳群（2基）、竜現社古墳、雷塚古墳、三つ子石池古墳等で、町内でも最大規模の古墳密集地帯である。時期的にも堀切1号墳等竪穴式石室を主体部に持つと推定される古墳が所在する他、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての壺棺群、土壙墓群等の所在も知られるなど多種多様な内容を持つ。

1. 堀切1号墳（今回調査）	10. 竜現社古墳（横穴式石室）
2. 堀切2号墳（今回調査）	11. 南原古墳（径15m、横穴式石室）
3. 長楽寺跡（奈良）	12. 城池古墳群（15基以上）
4. 丸岡古墳群（消滅）	13. 丸山古墳（古式の横穴式石室）
5. 雷塚古墳（方墳か）	14. 公渕池1号窓（7世紀前半）
6. 三つ子石池古墳（石室一部残存）	15. 公渕池2号窓（7世紀後半）
7. グランドカントリー遺跡群	16. 公渕池3号窓（7世紀末）
8. 蛇の角古墳群（16基）	17. 池下古墳群（3基）
9. 山大寺池西丘上古墳群	18. 宮池窓（8世紀前半）



第1図 周辺の遺跡地図

町西端の朝倉川水系には丸山古墳、城池古墳群（15基以上）等が知られている。

以上大きく4地域に分けて周知の古墳を列挙してきたが、後期段階に限れば量的には県内でも古墳密集地帯として著名な東に隣接する長尾町に匹敵するものとみなすことができよう。この地域には白鳳期から奈良時代にかけて相次いで建立されたと考えられている上高岡廃寺、長楽寺跡等の古代寺院が知られているが、このような古墳時代後期段階の隆盛にその成立の背景を求めることができよう。

堀切古墳群は吉田川東方の独立丘陵上に築造されたもので、北方には新川、吉田川流域の広大な平野部が広がる。現在、独立丘陵東西及び北方は両側の小谷筋を塞き止めて築造された堀切池が取り巻いている。周辺地域に所在する数多くの古墳群の中でも最も眺望が開ける位置に築造された古墳群であり、それらの形成・展開のなかで重要な位置を占める古墳群であるとみなすことができよう。

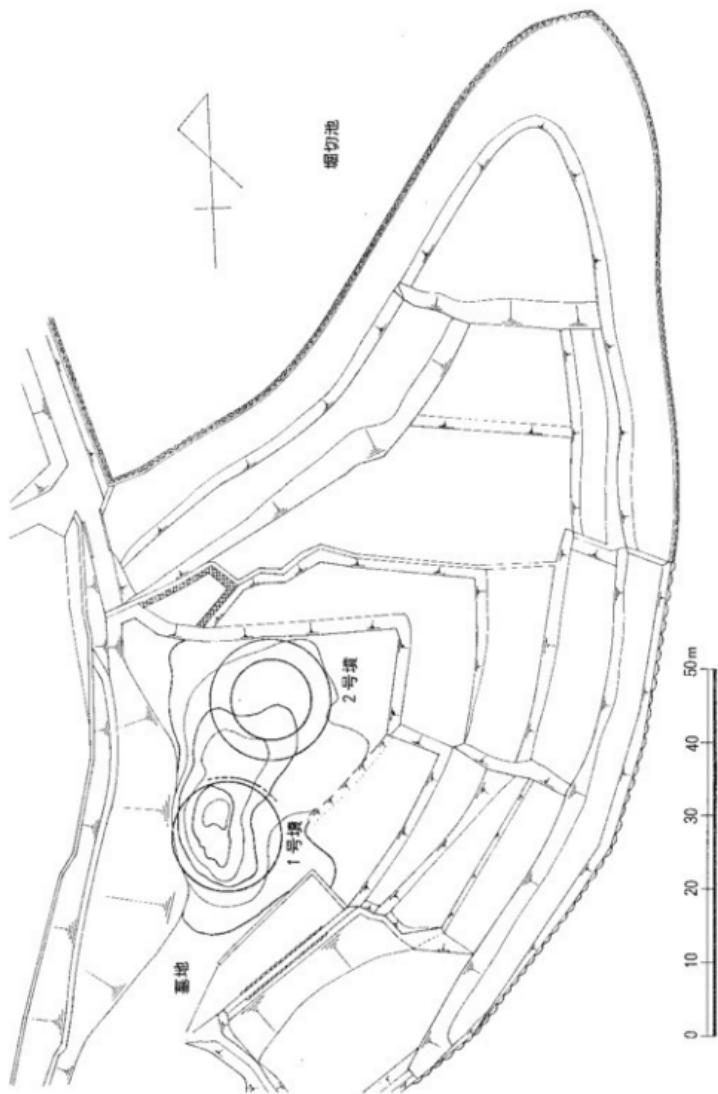
表2

1. 堀切1号墳（今回調査）	16. 石塚B2号墳（土壇墓）
2. 堀切2号墳（今回調査）	17. 石塚B3号墳（径8m、横穴式石室か）
3. 丸岡3号墳（昭和53年調査、消滅）	18. 石塚C1号墳（石組み、列石）
4. 渡池1号墳（径15m）	19. 石塚C2号墳（径15m、高さ1.2mの円墳）
5. 渡池2号墳（径15m、甕棺他）	20. 石塚1号墳（横穴式石室、消滅）
6. 丸岡A3号墓（甕棺墓）	21. 石塚2号墳（横穴式石室、消滅）
7. 丸岡A2号墓（径15m、土壇墓）	22. 石塚3号墳（横穴式石室、現存）
8. 丸岡A1号墓（土壇墓）	23. 石塚4号墳（横穴式石室、現存）
9. 丸岡B1号墓（甕棺墓群）	24. 石塚5号墳（横穴式石室、現存）
10. 丸岡B2号墓（甕棺、土壇、消滅）	25. 勝負谷1号墳（横穴式石室、現存）
11. 丸岡B3号墓（甕棺墓、消滅）	26. 勝負谷2号墳（横穴式石室か）
12. 丸岡B4号墓（甕棺墓、消滅）	27. 勝負谷3号墳（径15m、高さ1.5m）
13. 丸岡B5号墳（前方後円墳、竪穴式石室）	28. 吉谷遺跡（L字型の石組遺構）
14. 丸岡B6号墳（径8mの円墳、盗掘坑）	29. 蛇の角古墳群（16基）
15. 石塚B1号墳（前方後円墳？竪穴式石室）	30. 竜現社古墳（町最大級の横穴式石室）



第2図 付近の古墳分布図

第3圖 塚切古墳群周辺地形図

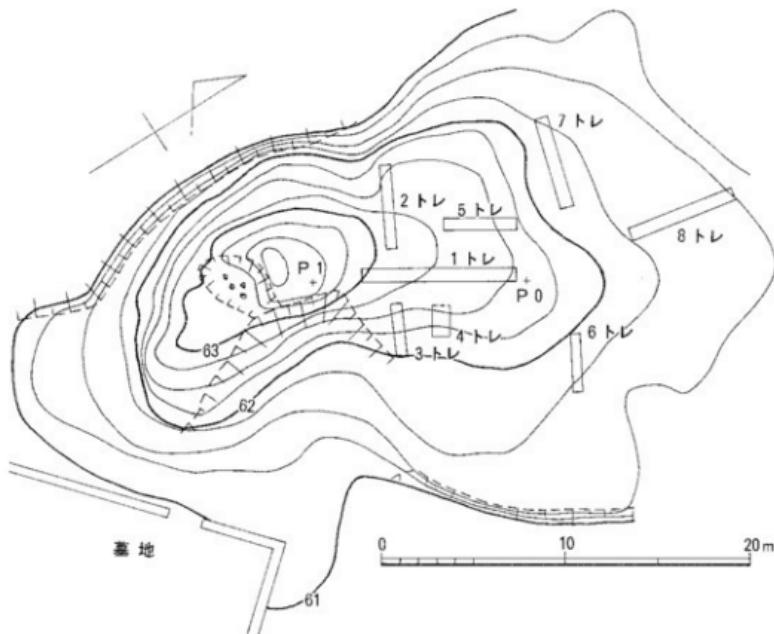


### 第3章 調査の結果

#### 1. 堀切1号墳

古墳の東半部は大きくえぐり取られ、西半部も基底部付近まで土砂崩れ等による崩壊が進んでいる。従って墳丘は現在南地方向に長い楕円丘を残すのみとなっており、その本来の墳丘を留める部分は南北両側の斜面部のみである。

墳丘の南側基底部付近は一部攢乱認められるが、弧状に明確な傾斜変換点が認められるためその位置を基底部をみなしてよいと思われる。この基底部ラインは61.75mのセンター付近に求められる。墳丘北側については試掘調査の1トレで基底部を画していたと推定される小溝を検出している。この小溝は幅が80cmほどで、深さは内側（墳丘側）から40cm、外側からは12cmの小規模なものである。小溝は墳丘斜面部との間に明確な傾斜変換によって肩部を



第4図 墳丘測量図、トレンチ配置図

形成しているため、溝の傾斜部が墳丘の斜面部を兼ねたものとはなっていない。したがって、この溝の肩の位置を墳丘基底部とすることができよう。この位置のレベルは62.92mであるため、墳丘南側の基底部とは1.2mほどの比高差があることになる。

この小溝は現在の地形からみて墳丘の上方にあたる北側のみで掘開されている可能性が高い。墳丘上方側の基底部を明確に設定するための堀切りに相当するものと言えよう。埋土は上下2層に分かれる。上層は暗黄灰色粘質土で溝の外方にまで一様に堆積している。円筒埴輪片を比較的多く包含している。下層は暗茶灰色粘質土で円筒埴輪片が少量出土している。

2トレではこの溝の延長部が確認されていないため弧状に掘り込まれているものと考えられる。墳形については円墳とみなすのが妥当であろう。

墳丘規模については南北両側の基底部間で計測すると直径14.5mを測るものとなる。高さについては南側では約2.1m、北側では0.9mとなり、南からみて大きく高く見せるような造作となっている。

墳丘中央に相当する位置には南北2.5m、東西4mほどの平面梢円形を呈する盜掘坑がみられる。坑内には人頭大の塊石が多数散乱しており、石室が存在していたことを物語る。塊石の形状、大きさからみて竪穴式石室であったものと推定される。なお、盜掘坑の壁面部をレンチ棒による探査を行ったところ、北面部では墳丘中に直線的に並ぶ塊石群の存在が確認された。したがって、石室の北長辺部についてはかなりの部分が残存している可能性がある。また、石室の主軸方位はほぼ東西方向に求めることができるようである。

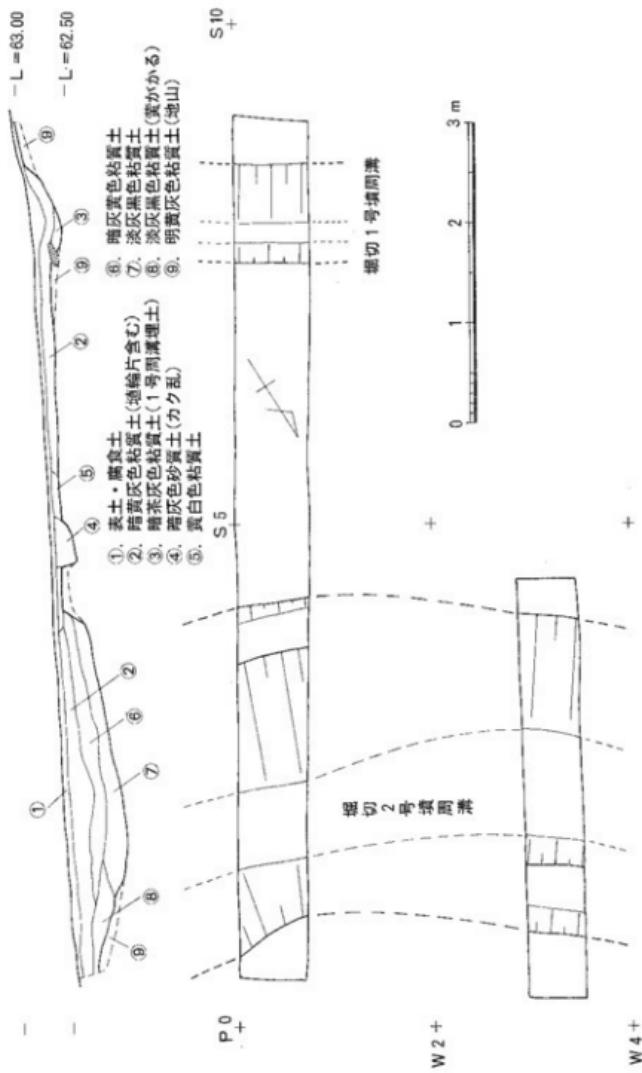
#### (1号墳出土遺物)

1トレ堀切り溝中から円筒埴輪が十数点、2トレから同じく細片が2点出土している。第7図1、2は1トレから出土したものである。

1は断面台形の低いタガを持つ。タガは低部幅1.4cm、端部幅0.6cm、高さ0.4cmで端面にはヨコナデによる凹面がみられる。2はやはり低いタガを持つが、端面は稜線が明確でなく断面形は円形に近い。低部幅1.5cm、高さ0.4cmを測る。タガの上下ともに接合時の強いヨコナデにより凹面が形成されている。上方には一次調整のタテハケが残存している。

稀少な遺物ではあるがタガ形状、調整等からみて川西編年のV期に相当するものとみなしうる。極めて大まかではあるが6世紀前半を中心とする時期に位置づけられよう。

第5図 1、5トレ平断面図



## 2. 堀切2号墳

1号墳の北側に築造された古墳で、1号墳との間の距離は両者の堀切り、周溝間で3.5mとかなり近接している、削平が著しく墳丘はほぼ完全に消滅している。

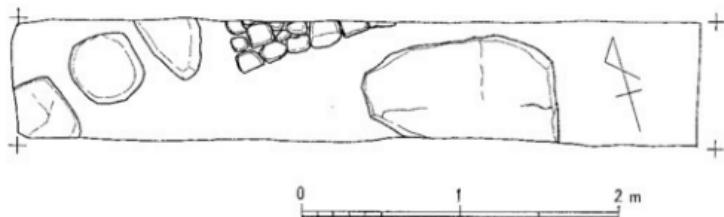
1、5トレからは幅3.2m、深さ60cmの大型の周溝を検出した。1トレでは外側の傾斜部が2段掘り状を呈している。上段の掘り方は垂直に近く下段は1.5mほどなだらかに下る。5トレでは外側傾斜部がほぼ同様の傾斜角度で下っているが、内側（墳丘側）は2段掘りとなっている。

溝内の埋土は大きく3層に分けられる。最上層は暗黄灰色粘質土で1号墳の堀切り上層と同一のものである。1トレ周溝南端付近の同層中から壺形埴輪と推定される体部球形の土器片が集中的に出土している。中層は暗灰黄色粘質土で遺物の包含は認められなかった。最下層は淡灰黒色粘質土で、5トレの同層中から須恵器高杯の脚部が出土している。また、1、5トレの最下層中から円筒埴輪の細片も少量出土しているが、胎土・色調ともに1号墳出土のものに近く混入したものと思われる。

6トレからは浅い溝状の落ちを検出したが、明確な周溝状を呈するものではなかった。8トレからは北端付近でやはり幅2m以上、深さ0.6mと大型の周溝を検出している。埋土の状況も1、5トレのそれに近似する。

1、5、8トレで検出した周溝の内側の肩から墳丘規模を推定すると直径10.5mとなる。高さについては不明とするほかない。

7トレでは東端付近で1.2m×0.7m、厚さ20cmほどの大型平石、西端付近で径40～50cmほどの中型平石、中央北壁付近で径10～20cm程度の小河原石群等を検出している。中型平石は一定間隔をあけて直列に並べられている。小河原石群は方形に区画した範囲に上面を揃えるように敷きつめられている。現状では石室との確証はなく、むしろ石室使用石材を再利用し



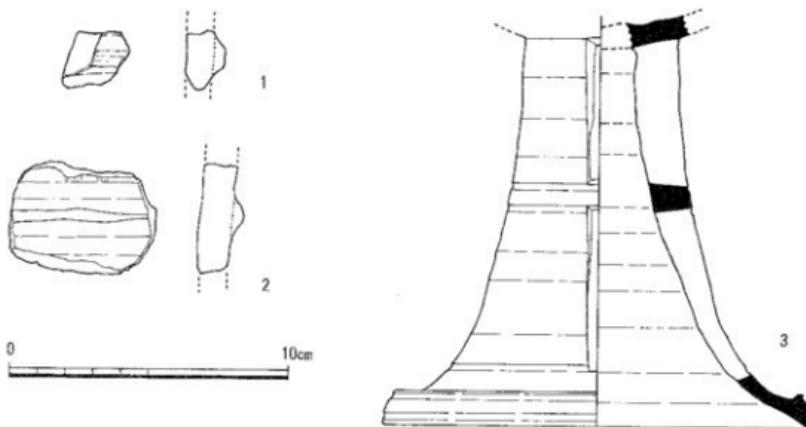
第6図 7トレ平面図

た敷石造構とみなすのが妥当であろう。なお、このトレンチ周辺には大型塊石が散乱しており同じく石室を構成していた石材と推定される。

(2号墳出土遺物)

図化しうるものは5トレ周溝最下層から出土した高杯脚部(第7図3)のみである。緩やかにラッパ状に開く脚部で、脚高13.8cm、底部幅15.1cmを測る。上下2段に長方形のスカシ窓を4方向に刻んでいる。端部は上方に摘み上げ内傾する端面に2条の凹線が巡らされている。脚中位のスカシ間の位置にも凹線が2条めぐる。

類例に乏しい資料であるが概ね6世紀後半を中心とする時期に位置付けられよう。



第7図 出土遺物実測図

## 第4章　　まとめ

今回の測量・試掘調査は範囲確認を行うのが主眼であり短期間で小規模なものであったため、古墳の詳細な内容確認はできていない。とはいっても、周知の堀切古墳（1号墳）に加えて新たに古墳1基を検出するとともに、両古墳の時期・内容等について若干とはいっても貴重な資料を得ることができた。

堀切1号墳は径14.5mを測る円墳で、堅穴式石室を主体部とする6世紀前半頃の古墳である可能性が高くなった。三木町内では初めて調査によって円筒埴輪が出土した点も注目される。町の南部丘陵地域では6世紀後半以降横穴式石室を主体部とする小円墳群が急増するが、それらに先立つ有力墳として位置付けることが可能であろう。当該期に円筒埴輪を樹立する古墳には甲冑等の武器類を副葬したものが多く、今後の調査・研究が期待される。

堀切2号墳は周溝を持つ径10.5mの円墳で、6世紀後半頃に築造されたものと推定される。墳丘・主体部ともにほぼ完全に削平を受けているが、本来横穴式石室を主体部に持つものであったと推定される。7トロ周辺には石室の基底石等が残存している可能性はある。

幸いなことに今回確認した2古墳は事業計画から除外された全域現状保存されることになっている。三木町内では実態が不明瞭な古墳が多いだけに、今後ともこのようないくつかの遺跡の範囲とともに内容を確認する趣旨の調査は可能な限り進めるべきであろう。



1. 1号填埋丘

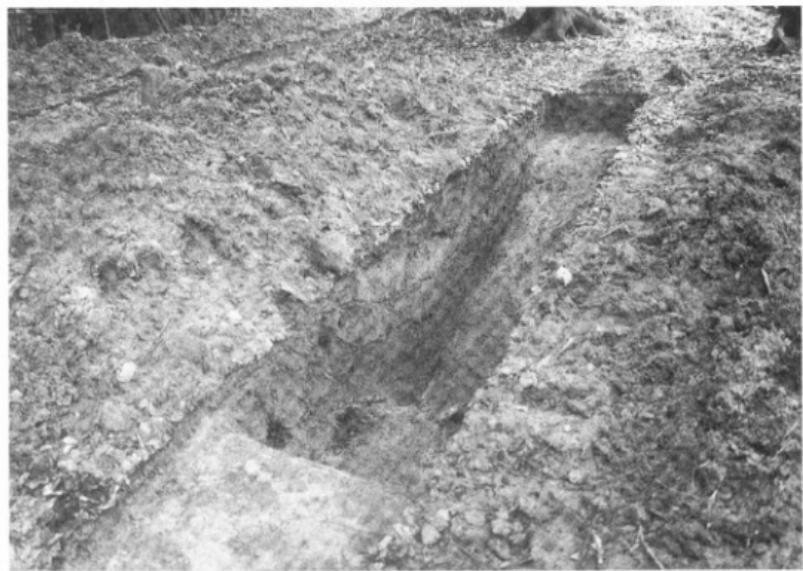


2. 1号填中央盗掘坑





1. 1 トレ全景（北から）



2. 5 トレ 2 号墳周溝





1. 7 トレ塊石群検出状況



2. 8 トレ2号墳周溝



## 三木町埋蔵文化財調査報告書

池戸八幡神社1号墳

堀切古墳群

平成6年3月発行

編集 三木町教育委員会

発行 三木町

印刷 高松高速印刷株式会社